

荒 金 大 琳 の 書

後 援 毎日新聞社・毎日書道会・(公社)創玄書道会・日本詩文書作家協会
会 期 平成30年2月20日(火)～25日(日) 午前10時～午後6時(最終日は午後4時まで)
会 場 東京銀座画廊・美術館(銀座貿易ビル5階) 東京都中央区銀座2丁目7-18 TEL 03-3564-1644

荒金大琳さんの個展の開催を祝して

日展会員

公益社団法人創玄書道会会長 石 飛 博 光

一九九六年。荒金さんが、金子鷗亭先生の諸作品の書の中から字を集めて『金子鷗亭書体字典』（上下）を出版された時はビックリした。膨大な量の書作品の中から字を集める仕事は容易なことでは出来ない。鷗亭先生の書の真髄を見ることが出来てありがたいことであった。画期的な貴重な仕事をみせてくれた。

また二〇〇七年には、中国の大雁塔に建つ「雁塔聖教序」の石碑の一字一文を直接撮影に成功して、刻字された一点一画を写真で見ることが出来た。これをはじめて見せてもらった時は驚きと感動で興奮した。こんなすごいことをやる人を見たことがない。その実践力には感服した。途方もない大きな仕事をみせてもらった。

また荒金さんは教育者として別府大学に長く教授として勤められ、大勢の優秀な学生を育てられた。すでに書家として、教育者として活躍されている卒業生が多数おり、将来の荒金グループの活躍がたのしみである。

昨年四月、地元大分県立美術館において、大個展を開催されて、大変な反響であったと伺っている。私は所用と重なってしまい、折角の機会、拝見出来ずに悔やんでいたところだったが、この度、東京において再度の個展を開いて下さるという。拝見出来ることを喜び楽しみにしているところである。

大分での大作展に出品した作品の大部分と新作の大作の数々を発表すると思う。図録の原稿を見せていただいたが、どれもエネルギーが溢れる大作で圧倒される。



金子鷗亭先生の作品の前にて
大琳書道会会員一同

『結』の「おむすび結んで母のあい…」は圧巻だ。『歴史のなかに』の「放射線状…」は直線を強調していて迫るものがある。『歴史の風』も腹の底から迫ってくる。『無』の「ないない…」の何でもないひらがなの繰り返しがいい。『茄子の花』のポリウム感が充実している。昔の作であろう、『漢からの脱出』で武将たちの夢を書いて情熱をひしひしと感じとれ見ごたえがあった。

若い時の漢字の臨書作品や創作大字作品はさすがに練度の高いものを見せていて見事だ。荒金さんの書作を支えてきたことがわかる作品群だ。

ところで、近代詩作品のほとんどはいつも「ななこ」の詩を書いている。ななこさんの詩は可愛くて、ほのぼのとして、太陽をいっぱい浴びたような、明るく、ぬくもりを感じさせる詩が多い。生き生きとして自然の輝きと人々の愛がいつぱいつまった詩である。実は、ななこさんは、奥さん「節子」さんのペンネームなのだ。とても仲がいい二人。羨ましい限りだ。子どもさんも皆、書に携わって活躍していて、まさに書道一家である。その中心はもちろん、ななこさんである。

荒金さんのやさしく、明るい書もいいが、失礼だが、あの風貌とは一致しない。どちらかというと、あの情熱いつぱいの燃えるような、迫力ある書き振りが魅力的だ。逞しさが紙面を圧倒しているような作品もいい。エネルギーが空間に溢れ、激しいタッチの作も私は好きだ。力強く迫力いつぱいの中にも彼のやさしさ、ぬくもりがこもっているからいい。そんな作品が荒金さんの顔らしさが出て好きだ。

大学教授を退官されたが、荒金さんのこと、静かにじっとしているはずがない。これからどんな展開をみせて進んでゆくのか…まだまだたのしみだ。あまり無理をせず、気楽に…、さらに大きく広がる荒金ワールドを展開して行ってほしい。そして、ななこ夫人を中心に、「荒金ファミリー藝術」をもっともつと膨らませて、夢いっぱいすばらしい書の世界を開拓してくれることを期待している。

分かりやすい言葉との格闘

毎日新聞社 学芸部記者 桐山正寿



一枚の家族写真に見入ってしまった。中央に荒金大琳・節子御夫妻。長女の申子さん、長男の治さん、次女の昌さん、三女の和佳子さんと、それぞれの家族が笑顔で取り囲んでいる。「驚異から逃れず守りぬく叡智と強靱な……」。肉太で骨力のある大琳さんの大作を前にして勢ぞろい。温かな雰囲気が出ると放射していて、確かな幸福感が自然に満ちてくるようだ。夫妻と4人の子どもが全員、書の道を進んでいると知れば、より深い感慨に襲われるのは間違いないだろう。

荒金大琳さんは真つ直ぐな人だ。幼少時に書こそ自分が進む仕事と見定めて以来迷わず一筋の道を突き進んできた。さらに金子鷗亭という偉大な師と巡り会って、書への思いに磐石な確信が加わった。現代の日本人が心を寄せられる近代詩文書―漢字かな交じり書き作品に取り組もうとの決意である。

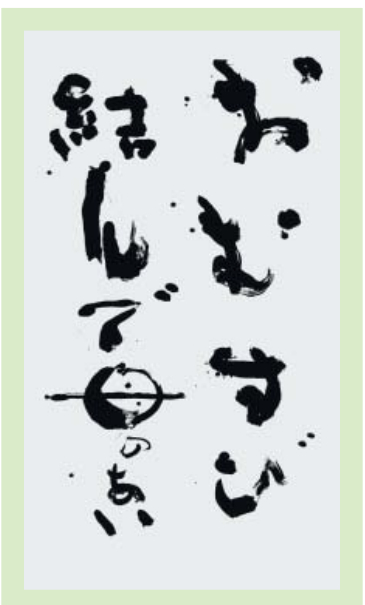
別府大学教授（現在名誉教授）として後進の指導にあたる経歴を紐解けば「雁塔聖教序」に関する論考、『金子鷗亭書体字典』の刊行、書道史を網羅したテキスト執筆など学究的かつ知的な態度が目立つ。が、近代詩文書の作品の題材として選ばれるのは、身近に接している文月菜々子（実は妻節子）さんの言葉（稀に荒金さん自身の言葉）なのだ。

「おむすび結んで母の愛……」▽「ゆきしんしんおんせんじん……」▽「ないないなんにもない……」といった大作の分かりやすい言葉の束は、多彩な書技を媒介として、やさしく痛切に私たちの胸に突き刺さってくる。書の前に自然体で立って、ぜひ言葉を読み進めてほしい。かつて鷗亭師が「君の書は意図というか、気負いというか……プレッシャーがいつもかかっている……極端な変化をとらずに、何とすることなしに悠然と書けること」と懸念を示した点は自然に解消し、逆に「柔らかくてのびのある、遠い、深い気分をただよわせてる君の線質は君にとって貴重な財産」(同)といった美点が、今回展の作品群に現れ出ているように思われるからだ。

そう。この書を中心に強く結びついている家族の肖像こそ、隠れた見どころと言える。冒頭の家族写真の笑顔大賞は断然、荒金夫妻である。「書の世界」に身を投げ出して生きてきたという半生への感謝のせいだろうか。

グツグツと温泉が沸き立つ別府。この地で荒金さんは沸騰するような情熱を書に注いできた。が、熱いばかりの湯が効能があるとは限らない。家族の愛がブレンドされて絶妙な湯加減を得た、というのが私の観察だ。

I
おむすび結んで母のあい





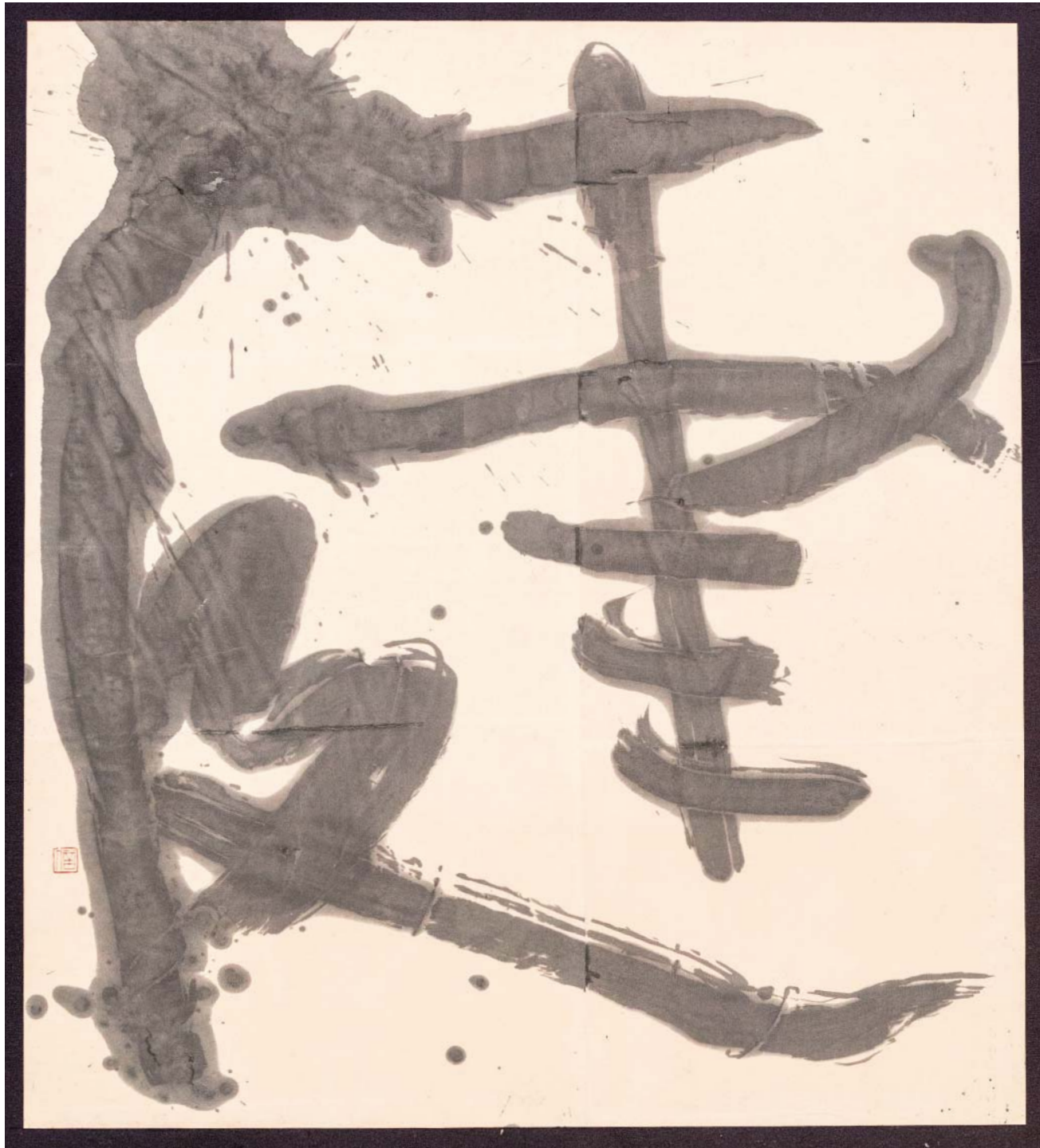
一
氣

206cm × 91cm



赤ん坊の様に生きたい
時々野蛮な叫び声を出して
空腹を訴える事をした
（高橋新吉の詩）

240cm × 120cm



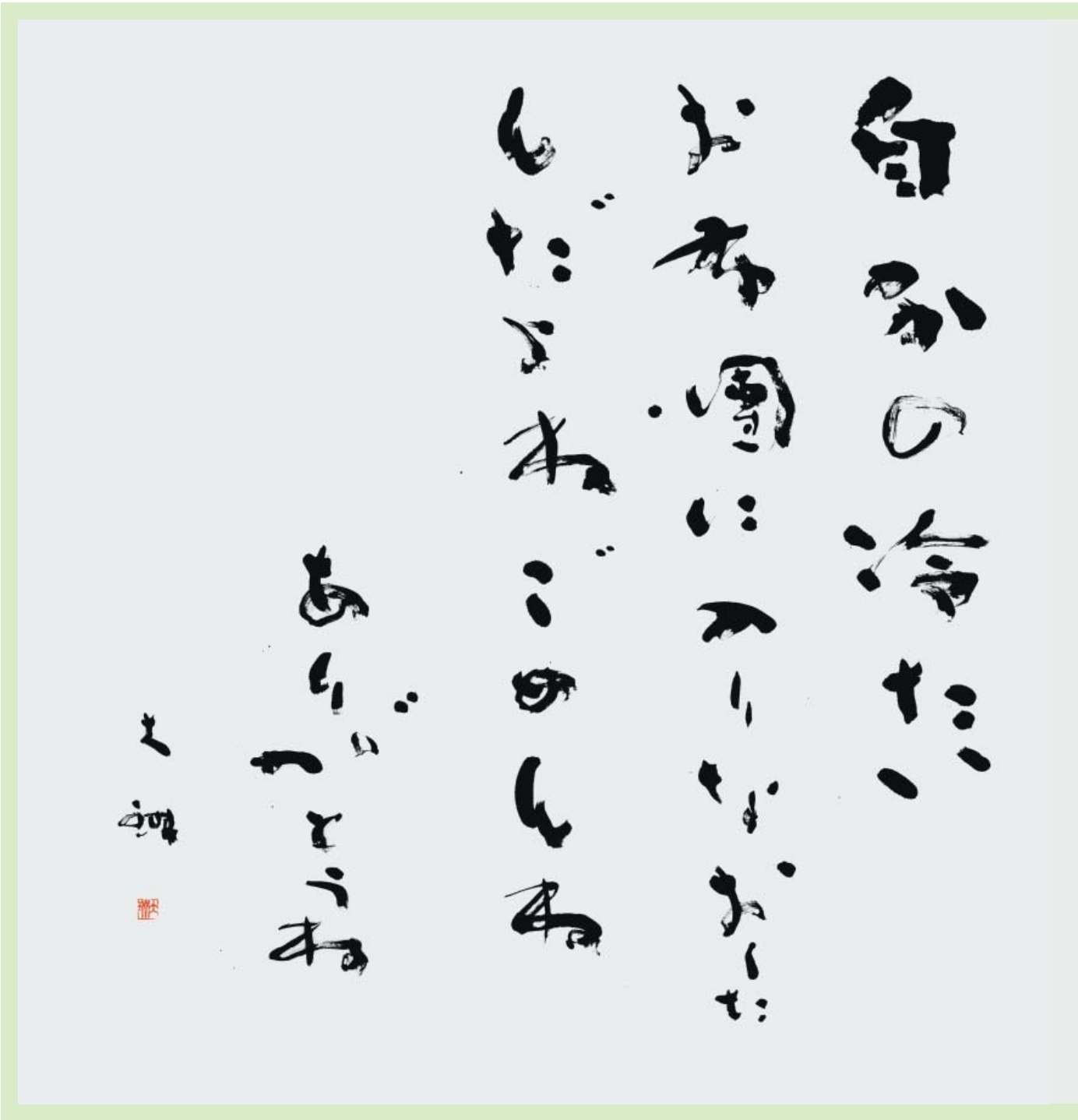
健

180cm × 180cm



髭
覽(ならん)

180cm × 91cm



白ふのふたは

おふとんにいりなまぬ

ただふたはこゝろし

ありとふね

し
あ

おばあちゃん

湯たんぽ入れておばあちゃんが

先におふとんに入って

体で温めてくれたねどこ

冬の日の暖かい思い出

おばあちゃんはそのあとで

自分の冷たいお布団に

入りなおしたんだよね

ごめんね ありがとうね(ななこの詩)



180cm × 454cm